

今日は漢詩の世界で詩聖と崇められる杜甫の『蜀相』という詩を学びました。蜀相とは蜀の宰相ということで、三国志で劉備を助け活躍した諸葛孔明を指します。

杜甫はなぜ諸葛孔明のことを詩に書いたのでしょうか？

今日の講義は一枚の中国古代地図を頼りに杜甫その人の人生を辿るお話から始まりました。詩聖と呼ばれ1500首もの作品が現代に伝えられている杜甫ですが、その人生は苦勞の連続でした。杜甫の活躍した時代は唐の最も盛んな時期、玄宗皇帝の時代です。同じ時代に、杜甫より少し前に唐王朝に仕え、宮廷詩人として活躍した李白がいます。玄宗皇帝は詩歌や音楽を愛する大変な文化人でしたので、常に優秀な人材を求めていました。しかし、玄宗皇帝は晩年、楊貴妃にのめり込み、だんだんと政治力を失っていきます。杜甫が宮廷に仕えたいと希望したときには、玄宗皇帝は杜甫の才能を認めつつも積極的に登用し優遇するだけの力がありませんでした。

「もしも、玄宗皇帝が楊貴妃を愛さなければ、李白と杜甫は玄宗皇帝の左右に仕える宮廷詩人として活躍したかもしれないけど、そうなれば皇帝を讃えるような詩ばかり作ってかえって面白くなかったかも知れない。悲劇的な現実があったからこそ、素晴らしい詩が生まれたと言えるよね」と植田先生。

日本人で知らない人がいない杜甫の代表作『春望』は安祿山の乱が起き、玄宗皇帝は蜀に避難し、杜甫が長安で軟禁状態になっていた時に書いた詩だそうです。玄宗皇帝の死後、息子の肅宗に仕えましたが、ソリが合わず左遷され、ついに家族を連れて流浪の人となります。旅の途中飢えで苦しんだりしながら、何百キロに渡る旅を続け、かつて孔明が本拠地とした蜀の地、今の四川省の成都に辿りつきました。そこで孔明を祀る廟を訪ねた時の詩がこの『蜀相』なのです。

## 蜀相

作者：杜甫

chéng xiāng cí táng hé chù xún  
丞相祠堂何处寻  
jīn guān chéng wài bǎi sēn sēn  
锦官城外柏森森  
yǐng jiē bì cǎo zì chūn sè  
映阶碧草自春色  
gé yè huáng lí kōng hǎo yīn  
隔叶黄鹂空好音  
sān gù pín fán tiān xià jì  
三顾频频天下计  
liǎng cháo kāi jì lǎo chén xīn  
两朝开济老臣心  
chū shī wèi jié shēn xiān sǐ  
出师未捷身先死  
zhǎng shǐ yīng xióng lèi mǎn jīn  
长使英雄泪满襟

成都で数年暮らしたのち、岳陽から今の長沙に行き、杜甫はそこで生涯を閉じました。享年59歳。

生まれは名門の出、祖父も宮廷詩人でした。7歳から詩を書き、14歳で社交界デビューし、当時の著名人たちと酒を酌み交わしながら詩を書いていたという天才少年でした。しかしその後科挙の試験に失敗します。プライドの高い杜甫はその後科挙の試験に挑戦し続けることはなく、あくまで自分の才能を時の王朝で発揮したいと詩を書き続け、名門貴族たちに送り続けるという、凄まじい程の情熱を傾けて就職活動をしたのですが、成功することはありませんでした。その後、玄宗皇帝の発案で、一芸に秀でた人材を拾い上げるための補充試験がありました。杜甫も応募しますが、時の権力者の横やりで、全員不合格になってしまいました。それでも杜甫は詩を書き続けます。

何故そこまで詩作にこだわったのか？ そこには杜甫の理想がありました。玄宗皇帝から詩の才能を認められて側近に加わり、理想の政治を実現したかったからです。「致君堯舜上」、これは杜甫の詩の中に出でてくる言葉ですが、自らが仕える皇帝を、古

の聖君主の誉れ高い堯帝と舜帝以上にしたい、という意味です。つまり、杜甫はナンバー2の地位でトップを育てたいという、いわばドン・キホーテのようなどてつもない野望をもっていたのです。

これが、諸葛孔明への尊敬に繋がるのです。孔明と言えば、三顧の礼に応えて、劉備に仕えました。そして、劉備の死後も息子の劉禅に仕え、その生涯、忠誠を尽くしナンバー・ツーに徹した人物なのです。「中国ではナンバー・ツーこそ最も素晴らしいという観念が昔からあって、偉大なるナンバー・ツーになることが杜甫の理想だったんだね、だから孔明の生き方が理想と重なったんだね」と植田先生。

孔明については、「孔明と言えば『三国志演義』の赤壁の戦いで神がかった活躍をしたことで有名だけどね。『レッド・クリフ』という映画にもなって…。でも、アレはウソだから…。杜甫が知っている孔明は、千古の名文『出師の表』に見られるような、忠誠を貫いた人。息子にトップの才能がなければお前が後を継げ、という劉備の遺言にも乗らず、劉備の愚昧な息子劉禅を支え続けた偉大なるナンバー・ツーなんだよね」

中国文化の中のナンバー・ツーの美学、そうか、古代の、国と国の争いは宰相の知恵比べみたいなものだったなあ、トップは頂点に立つ才能がいるけど、ナンバー・ツーに求められる高度な資質は確かにナンバー・ワン以上のものがあるかも、と腑に落ちました。

だからこそ、杜甫は自分の感情を詩に吐露するというより、常に天下国家を想い、先んじて民を憂うという、儒教の基本的思考を優先したのです。それが詩聖と呼ばれる所以だそうです。

また杜甫の詩は自伝でもあり自分史でもあり、当時の政治、社会、文化を記した歴史資料でもあるそうです。そこのところが、同じ大詩人といっても、李白と一味違う、ということだそうです。

「杜甫の面白いところは試験に落ちているところだね～。李白はそもそも科挙を受けていない、王維は一発で合格した人。でも詩人としての順番は、1

位杜甫、2位李白、3位王維…。こういう話は若い学生にウケるよね。あと、唐の時代は平均的な優等生よりも、個性が重んじられた時代だった。たった一首の詩だけで、千数百年後の歴史に名を残すことになった人もいましたね」。人間杜甫を巡る盛り沢山の内容の締めくくりに、植田先生の漢詩への想いと学生へのエールがストレートに伝わってきました。

この詩は七言律詩というスタイルで書かれています。字数は五言絶句の倍ですが、李白は絶句を得意とし、杜甫は律詩を得意としたことから、〈李絶杜律〉と言われるそうです。李白はフィーリング人間、湧き上がる感情を短く鋭く鮮烈に吐き出すのを得意とし、杜甫は自分の考えをまとめてじっくり伝えるタイプ。両者の個性が対照的なのが面白いですね。

律詩は韻と平仄（声調）の規則がきちりと決められており、「碧草」と「黄鸝」、「三顧」と「両朝」など対句を入れたり、平仄を字句の前後で合わせるなど、七言×八句の詩形に、計算されたハイテクニクが散りばめられています。また表現の上では、

「空好音（空しくも美しい音色）という、空しさと美しさを一つの言葉にしている所に杜甫のセンスが光ります。小鳥の美しい音色を残すだけで、かつての英雄はもう居ない。しかし英雄への尊敬の念は永遠に後世に続いていく、というところに救いを求めているんじゃないかなあ～」。

植田先生の解説で詩人の心がグッと身近に感じられました。何千年も昔に生きた古人の想いが感じられる瞬間は、横たわる膨大な時間の川が消えて無くなるような錯覚を覚えます。

杜甫の律詩には法則の乱れがほとんどないそうで、そこにも杜甫の誠実かつ周到で真面目な人柄を感じます。生涯四人の妻をもった李白とは対照的に、一人の妻を最後まで愛したところにも杜甫らしさを感じます。

今日は、死後に詩聖と崇められるようになったものの、苦難に満ちた生涯を過ごした、杜甫の人物像と実人生にじっくり迫る豊かな時間を堪能しました。